

## *Philosophy of Psychology* (Bermúdez, J.L.)

### 10. Thinking and Language

---

- 10.1 言葉で考える 1 : 内語仮説
- 10.2 言葉で考える 2 : 配線仮説
- 10.3 実行状態
- 10.4 実践的推論と思考の言語
- 10.5 知覚の統合
- 10.6 概念学習

#### ● 思考の言語 (LOT)

- LOT 仮説によれば、認知は言語形式であり、それは思考と表象の本性に関する基本的事実の帰結であるという。「マスター論法」によれば、思考の体系性 (systematicity) と生産性 (generativity) は、思考が本質的に文的構造の操作を伴うということによって説明されるという。前章では認知アーキテクチャに関する思考の言語とコネクショニズムの論争を見たが、そこでは自然言語の体系性から思考の体系性が生じるという妥協案を考慮した。この章はさらに進めて、LOT 論者と、自然言語が LOT のすべての仕事をできるという論者との対話を見てみよう。
- 公共言語と思考の間には、「フィットの方向」についての重要な問題群がある。
  - ☆ ① LOT 仮説の基本的根拠は、言語学習に言語が必要であるということだ。語が意味する者についての仮説を立てるためにもとから言語を自由に扱えないと、公共言語を獲得できないという。この論法は、特定の言語学習メカニズムに関する経験的主張と、言語理解に関する哲学的主張を統合したものであり、両者とも論争中のものだ。
  - ☆ ② 言語はいかにしてコミュニケーションに使われるのか。LOT 仮説が採用する、言語の「コミュニケーション」説 (communicative conception of language) によれば、公共言語は単に考えを伝える道具に過ぎない。我々が公共言語の参加者であるという事実は、我々の思考の構造と内容に関していかなる含意も持たない。むしろ、我々が使う文に意味を与えるのは思考の構造と内容である。なぜなら、言語使用における意図は、言語理解のされか

たを決定するからだ。コミュニケーション説に対する反論によれば、言語生物と非言語生物の認知能力には基本的相違があり、公共言語への参加によってこそある思考タイプが可能になるという。すなわち言語は認知において構造的役割を果たすという。

● この章でやること

- 10.1：内語仮説 …我々は自然言語の語で思考するという説。
- 10.2：配線仮説 …内語仮説の拡張。公共言語の獲得により認知アーキテクチャに根本的変化が生じ、ある思考タイプが可能になるという。
- 10.3：LOT 仮説からの内語仮説と配線仮説に対する批判 …非言語生物の思考行動を説明するリソースが失われてしまうというもの。Fodor はマスター論法に加えて、特定の基本的認知能力が言語依存的であるという強力な議論を展開する。これは LOT 仮説の根拠となる、なぜならその能力は非言語生物にも帰属可能だからだ。
- 10.4：実践的意思決定 …Fodor によれば、それは効用計算と言語媒体を伴う。
- 10.5 / 10.6：知覚統合と概念学習 …Fodor によれば、両者は同一形式であり、仮説の形成・検証・改良を伴う。末端環境中の対象に関する仮説であれ、概念の外延にかんする仮説であれ、その仮説は言語的に定式化されなくてもよい。ここでもやはり、知覚と概念学習は言語生物にだけ限定されるはずがないので、LOT がなければならないという。さらに言語学習プロセスには、その言語の表現能力をもった表象媒体が必要であるという (10.6)。

---

## 10.1 Thinking in workd (I): the inner speech hypothesis

---

● LOT 仮説の利点

- **LOT 仮説によれば、統語論的性質と意味論的性質の間に同型性を示すような文的構造を、思考は操作するという。**思考内容の構造は、認知システムにおける因果的処理に入る物理体の構造に反映されている。このような心に関するピクチャーがもつとされる利点は次の通り。

- ☆ ①統語論と意味論の間の同型性によって「内容による因果」(causation by content)を説明する。
- ☆ ②無限数の新しい思考をなす能力を説明し、思考の入れ替え(permutation)を説明する、唯一の方法である。

### ● LOT 仮説への批判——内語仮説

- LOT 論者は、文的構造の本性に関してさらなる意見を持つ——そのような文的構造は、公共言語に依存しない内的 LOT の文でなければならないと言う。しかしたとえ思考が文的「乗り物」(vehicles)を持たなければならないとしても、なぜ公共言語文がこの乗り物になれないのか？なぜ私的な内的 LOT で考えなくてはならず、公共言語で考えることができないのか？
- またこのような批判においても、公共言語で考えるとは一体どういうことか？最もラディカルな提案は、「内語仮説」(inner speech hypothesis)である (Sellars, Churchland)。内語仮説によれば、意識的思考(問題解決や行動決定のときに従うような思考タイプ)は、公共言語文の操作を伴う。命題的態度とは、無言に発話されている、公共言語文に対する関係として見なすことができる。命題的態度は発話行為に類するものであり、熟考プロセスは内的独話(inner monologue)の1タイプであることが判明する。
- 内語仮説は「命題的思考」(propositional thinking: 命題的態度の語彙を用いて記述するタイプの思考)にのみ適用可能である。我々は様々なタイプの非命題的思考をなす(例えば、心的イメージを操作したり視覚的想像を実行して解決するタイプの問題解決)。我々は自らの体性感覚や感情などの質的狀態を意識する。さらに、前章で強調したように、我々の思考の多くはパターン発見とテンプレート認識を伴うが、これらは命題的思考ではない。駐車スペースが十分あるかどうか計算するために視覚的想像をするとき、命題を熟考するのではなく視覚的イメージを操作する。

### ● 命題的思考と非命題的思考の相違点

- 相違点① 思考内容について …命題的思考は that 節で表現される内容を持ち、各命題的思考に対して、その内容を与える(と直観的に思われる)ような文がある。非命題的思考は様々な点で異なっている、例えば視覚想像の内容を文で与えるのは通常不可能である。それに対して命題的思考に特徴的なのは、信念の内容以外には何もないという点である。即ち内容を与える文で捉えられているもの

上には何もないということだ。

- 相違点② 真理値について …命題的文は真理値を持ち、文の間で真理値に関する論理的关系がある。なので、理想的な命題的思考者は、論理関係を反映した思考推移をなす。対して非命題的思考は、では思考の間にそのような関係はない。例えば、視覚的像の間にはそのような関係はない。

#### ● 内語仮説の問題点

- 問題点① 自然言語文をイメージするとき、何が起きているのか。内的な公共言語文は視覚的にも聴覚的でもないのなら、自然言語文をいかにして表象するのか、その乗り物は何か？
- 問題点② 内語仮説は、認知アーキテクチャー一般については何も主張しないが、LOT 仮説は思考の全タイプの力学について一般モデルを与える。また、例え内語仮説を支持する議論（内観からの直接論証など）を認めるとしても、これらは思考の現象学を与えるだけである。内語仮説は思考の本性についての一人称パースペクティブしか与えてくれない。

#### ● 現象学と認知アーキテクチャーを区別せよ

- **思考者にとって思考が何であるかの説明と、何がそこに思考が生じることを可能にするのかの説明は根本的に異なる。**もしかしたら公共言語文について黙って考えるという一人称経験が可能なのは、公共言語文が LOT で表象されているからであるのかもしれない。内語で真実に進行しているのは、公共言語文が LOT で表象され、その表象の乗り物は LOT の文である、ということかもしれない。
- 現象学の問題と認知アーキテクチャーの問題を区別するのは重要だ。**現象学からの議論(パーソナルレベル)は LOT(サブパーソナルレベル)への反論にはならない、なぜなら LOT は現象学についての主張をしないからだ。**しようと思えば LOT 論者は内語仮説の実質的主張を受け入れることができるし、LOT 論者は意識的命題的思考が自然言語文の操作を伴うということは主張する必要がない。LOT における文操作が、内観的にアクセス可能なパーソナルレベル現象学を基礎づけると主張すればよい。
- LOT が主張する認知アーキテクチャーが内語仮説をいかに説明し認めるかは未解決であるが、**内語仮説は LOT 仮説と直接的に不整合なわけではない。それらは異なるレベルの説明である。**しかし内語仮説を拡張して、LOT 仮説と不整合にすることはできる。それを「配線仮説」と呼ぼう（次節）。